



大王のひつぎを運ぶ実験航海

第2部 現実に夢の向けて

現在、全国的な注目を集めている馬門石。宇土を舞台にした日本古代史上の謎に皆さんも挑んでみませんか。

第二回 古代の運搬具「修羅」の復元に挑戦

「動くのかな・・・」

これが修羅に石棺を載せた総重量が9トンにもなるのだれもが最初に考える感想です。今ならばダンプカーやクレー

ン車を使えばあつという間ですが、人力となるとなかなか思うようにいきません。石棺がうまく修羅に載らない、軌道修正が難しいなどいくつもの問題がありました

修羅の図面のみを手がかりに復元しました。復元の際、なぜこの位置に穴が必要なのか、地面との摩擦をどうするのかなど試行錯誤は続きました。「考えるより、まずやってみる」と木村さん。この修羅の構造はとも考えぬかれていて、1つ1つの穴の位置に意味があり、てこの原理などを存分に利用する仕組みになっています。木村さんに修羅についての説明を聞くと、機械がない時代に人がいかに合理的に考えていたかがよく分かります。

運命的な出会い

修羅の原木とは運命的な出会いがありました。

地権者の丸目智さんは「この木は代々、運搬具として使おうと言われてきた」と事業



修羅の製作にはげむ木村さん

馬門地区で行われた石棺・修羅の完成セレモニーでは、コロやテコを使い、約300人もの人が一つになり力一杯に修羅を引っ張り大成功をおさめました。このとき、中心となり指揮をとっていたのが、「修羅」の復元に挑んだ熊本県青年塾の木村浩徳さん（網引町）。

木村さんは大阪の古墳から発掘された



完成した修羅と石棺
(宇土マリーナに展示)

修羅データ

陸送用の木ゾリのことで、Y字に分かれた巨木の二股部分に石材などを載せ、幹に縄を結び、多人数で引くもの。

石棺を海岸まで陸送する際にこの修羅が使われました。

全長:6.22 M 幅:0.73 ~ 1.56 M

高さ:0.28 ~ 0.73 M

原木樹種:アラカシ(樹齢約250年)